

平成 30 年 1～4 月のかつお一本釣り漁業における漁況と 近年の動向について — 経営流通部 —

本県の基幹漁業であるかつお一本釣り漁業は、北上するカツオ魚群を追って、中南洋から東北沖合まで漁場を展開して行きますが、近年、不漁のカツオに代わり、上半期はビンナガ主体の操業によって漁獲を上げており、今期も特徴的な操業実態が捉えられたことから、平成 30 年 1～4 月（以下、「今期」という。）における漁況としてまとめました。また、近年のかつお漁業の動向についてもご紹介します。なお、以下に引用する漁獲量は、全て Q R Y 情報（漁船間無線連絡資料）に基づくものであり、総漁獲量とは異なりますのでご留意下さい。

1 今期の漁況、CPUE（t/隻・日）

平成 30 年 1～4 月における本県所属かつお一本釣り漁船によるカツオ漁獲量(図 1)は 3,081 トン、前年同期(平成 29 年 1～4 月)の 3,006 トンと比較すると 102%と微増しているものの、過去 5 カ年同期平均(平成 25～29 年:3,873 トン)との比較では 80%とやや低水準となっています。

月別に見ると、2 月は低調だったものの、北緯 20 度以北～日本近海における水温の上昇に伴い、3 月以降は北上群の釣獲が伸び始め、4 月には北緯 30～35 度付近の日本近海で好漁場の形成が見られたため、例年を上回る漁獲量となりました。

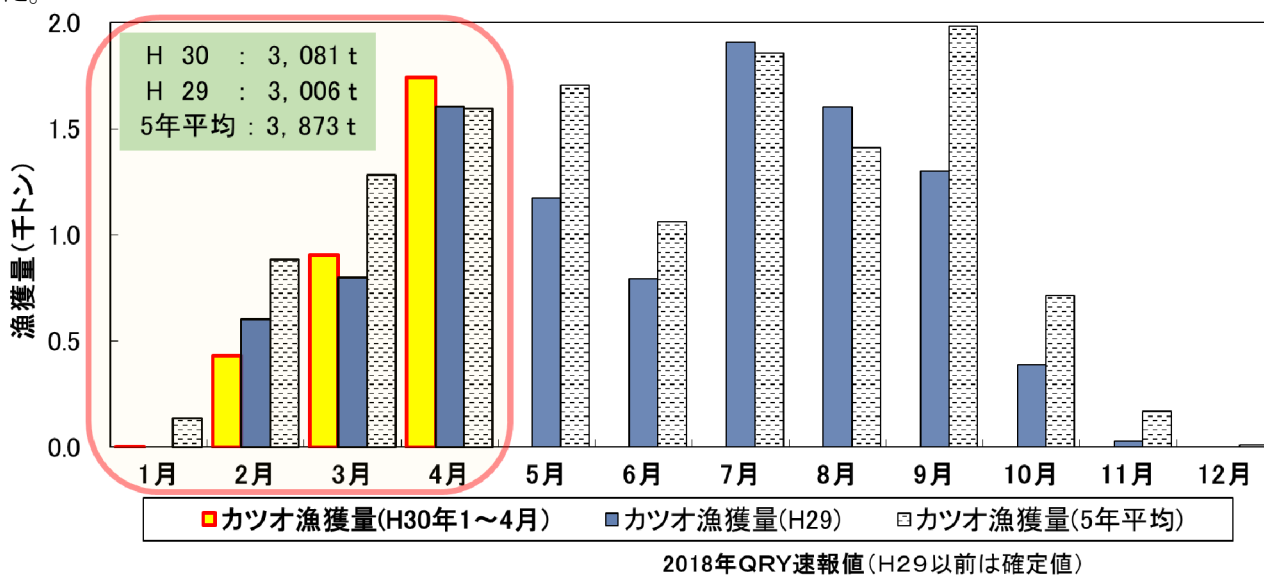


図1 カツオ月別漁獲量の推移

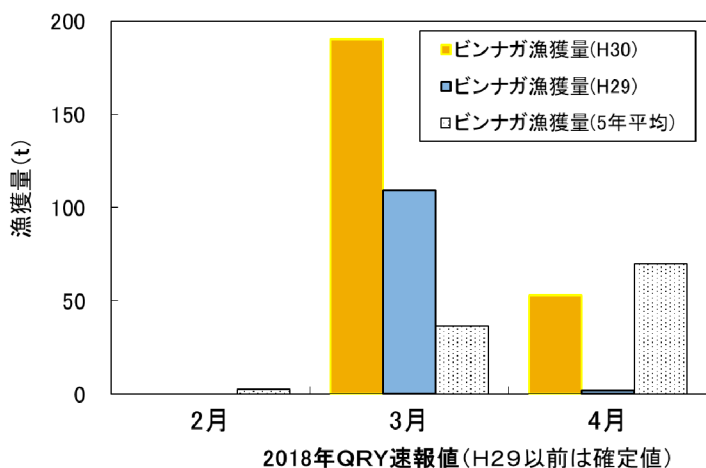


図2 ビンナガ月別漁獲量の推移(2～4月)

また、例年 5 月以降に漁が本格化するビンナガ漁獲量(図 2)は、やや早期の 3～4 月に、散発的に漁が見られ、243 トン漁獲されましたが、4 月まではカツオ中心の操業となっています。

今期はカツオ漁場の形成が比較的沿岸に近い海域で続いていることに加え、ビンナガに関しては盛漁期前の情報でありますので、5 月以降の状況を引き続き注視していきます。

次に、カツオの漁況を CPUE(単位努力量あたり漁獲量(単位：t/隻・日)) の推移から見てみます。なお、ここでの努力量は、出漁している漁船のうち、漁獲のあった漁船の一日あたりの隻数(一日あたり有漁隻数)としています。

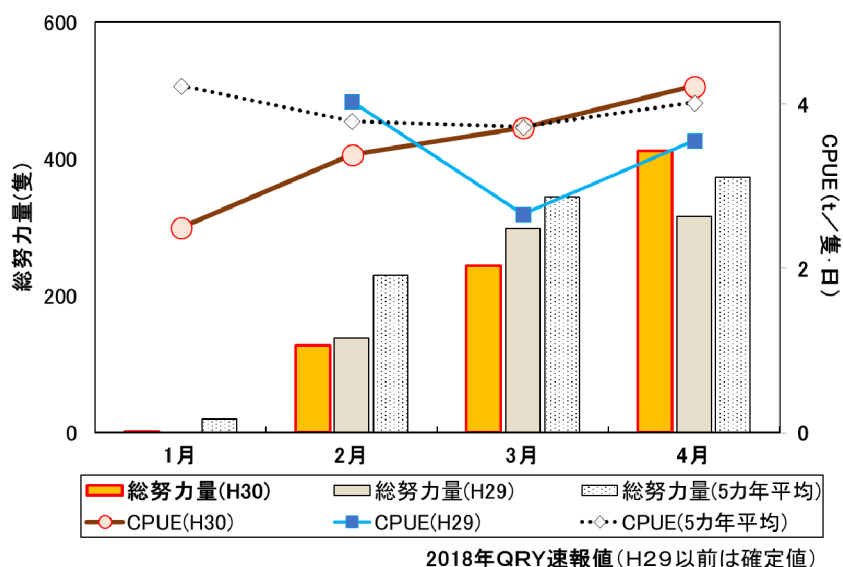


図3 カツオ月別総努力量とCPUEの推移

今期のカツオCPUEは、2~4月にかけて、月別総努力量(1日あたり有漁隻数の月累計)の増加に伴って、2月は3.4t/隻・日、3月は3.7t/隻・日、4月は4.2t/隻・日と徐々に上昇し、4月には5年平均を上回る水準となりました。

総努力量は3月までは低く、4月に急伸びて前年、5年平均ともに上回っています(図3)。

これは、2~3月は漁場がより遠い南方の海域に形成されていたことから操業頻度が低くなっていたものが、その後4月にかけて日本近海で好漁場が形成され、日帰りを含む短期操業が増加したこと等により、前述したように漁獲量とともに、4月の総努力量も伸びる要因となったと考えられます。

2 近年の漁況の推移

平成25~29年のカツオ漁獲量の推移を見ると、かつお一本釣り漁業におけるは1万8千トン近い平成25年を除いて、概ね1万2千トン前後で推移しており、CPUEは年変動が大きいものの、年間平均は約4~5t/隻・日前後で推移しています(図5)。

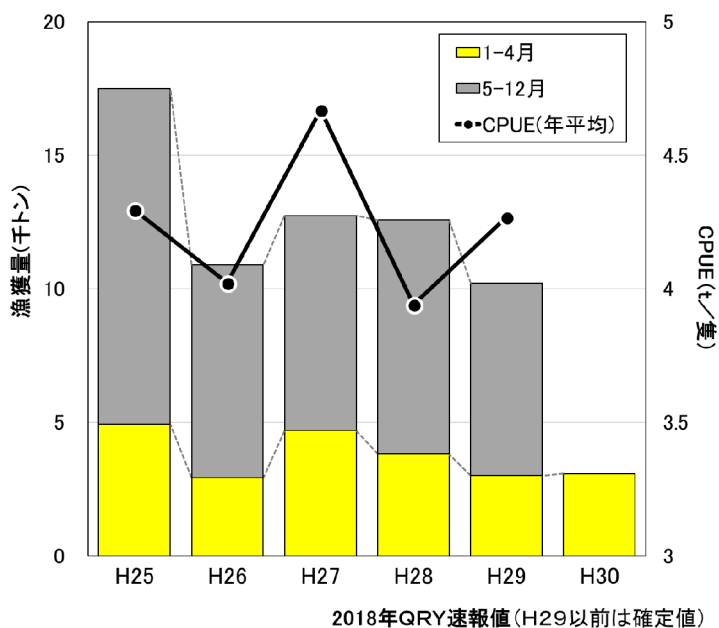


図4 カツオ年間漁獲量とCPUEの推移

また、カツオ漁獲量を1~4月と5月以降に分けて見てみると、近年は年によって漁獲量だけでなく漁獲時期の変動も大きくなっており、終盤の漁場形成状況によっては、漁期の終了時期が早まるなどの現象も起こっています。

加えて、全国的にも漁期や漁場形成の不安定化が見られ、さらには燃油価格の変動や、餌用のカタクチイワシの資源減少等が、出漁する船の数や、操業頻度に影響を及ぼす可能性もあり、水産試験場では、今後も引き続き様々な要素を考慮しながら、資源状況と漁場形成について注意深く観察し、研究を続けて参ります。